

山と博物館

第46巻 第5号 2001年5月25日

市立大町山岳博物館

特集 大町山岳博物館創立50周年記念 特別企画展
「岩橋崇至写真展 ―北アルプス幻想行―」 6/9(土)～7/29(日)



大 槍 (90×120cm)

撮影 岩橋 崇至

開催にあたって

大町山岳博物館創立五〇周年記念特別企画展として「岩橋崇至写真展―北アルプス幻想行―」を開催いたします。

岩橋さんは常に北アルプスに熱い眼差しを向けておられます。青年時代、最初に訪れたのが春の湖沢で「モルゲンロートに輝く穂高の吊り尾根の息をのむような荘厳な姿に感動したことが写真家としての原点であった」と述懐されています。以来ロッキーマン、エベレストをはじめ世界の名峰も数多く撮られています。昨年は、フランスで開催された「新世紀を拓く／世界一〇人の山の写真家展」に日本からただ一人選ばれたのはじめ、山の博物誌ともいえる『北アルプス大百科』(TBSブリタニカ)を出版され話題となっています。

水雪に両側を削られ瘦せて険しい岩くずの尾根、引きずり込まれるような深い峡谷の恐怖、湧き昇る濃霧に一瞬かき消されそうな見上げる頂に、小さくひとり立つ幻想的な黒い人影。自らの足で深く懐へ入り込み、幾日も幾日も辛抱強くチャンスを待ってその一瞬を捕らえた数々の写真は、大自然の無限の広がりや威厳にみちあふれ、観るものを圧倒します。

しかし岩橋さんはこの一〇年間、ファインダー越しにのぞくその自然が微妙に変わってきていて、何か違和感を覚えると警鐘を鳴らされています。かけがえのない宝「北アルプス」。この写真展を通して、山と人の営みとの関わりにも目を向けていただけたらと思います。

この機会にぜひ大勢の皆様からご高覧いただきますようお願い申し上げます。

(大町山岳博物館創立五〇周年記念事業
実行委員会・市立大町山岳博物館)

岩橋崇至写真展 — 北アルプス幻想行 —

岩 橋 崇 至

北アルプスに通いはじめて三八年が経ちました。最初に訪れたのは春の涸沢でした。今でもその時の景色が鮮明に浮かんできます。夜行で松本へ、そしてバスに揺られて上高地へ。梓川沿いについてうねうねとした道でした。今のようにトンネル続きの道ではありません。

そんな寝ぼけ眼に突然飛び込んだのは、モルゲンロートに輝く穂高の吊尾根でした。この世にこんな美しい所があるのかと、息をのむような光景でした。河童橋からは梓川に沿って、新緑むせ返るような道を重荷にあえぎあえぎたどりしました。前穂の北尾根から屏風岩を仰ぎながらの道でした。まだ雪に覆われた涸沢に天幕を張り、一週間ほどの雪上訓練でした。毎日天気が続く、真っ黒に日に焼け、顔がぼろぼろになりながら厳しい訓練に明け暮れました。慣れない水づくりから、まずいガンタ飯に味噌汁をぶっかけてかき込む毎日でした。それでも頑張れたのは、朝夕見上げた涸沢を囲む山々の荘厳さでした。雪上訓練が厳しかったせいか、なおさらその光景が心にしっかり住みつき、現在まで振り続ける原動力になったものと思われます。私の山の原風景となったのが「穂高」です。

学生時代は夏休みともなると、北アルプスに入っていました。三年生の夏山はリーダーとして針ノ木峠から白馬岳までの縦走と、清水平より祖母谷に下り、仙人池より剣沢へと縦走を試みました。この年は梅雨明けが遅れ、

白馬までくる日もくる日も雨に降られ続けました。当時清水平は自由に天幕を張ることができました。清水平のお花畑でやっと梅雨が明けて、一日かけてすべてのものを、体の芯まで乾かしました。そして剣沢の定着合宿では剣の岩場めぐりで、それまでのうさをはらしました。

山下喜一郎氏の弟子になった年は、立山より薬師岳を越えて黒部五郎岳と槍ヶ岳、穂高連峰と大縦走でした。黒部五郎カールで天幕を張り、中ノ岳の天上キャンプと、今思えば贅沢なキャンプ生活の中での撮影旅行に連れていってもらいました。北アルプスの稜線歩きも充実したものでした。こうした縦走に対する長年の思いを込めて撮ったものが、『アルプス大縦走』です。もちろん、田淵行男氏の尾根路を意識したものにはありません。



虹かかる槍ヶ岳 (90×120cm)



穂高連峰

(90×240cm)



シュカブラと常念岳

(90×240cm)



厳冬の赤木沢 (90×120cm)



初冬の白竜峽 (200×270cm)



瀑流白竜峽 (90×220cm)

黒部溪谷

アルプス大縦走をしている時に、気になる存在がありました。それは眼下に展開される黒部の谷の姿です。もともと俯瞰することの好きな私にとって、この黒部の姿は遠くから眺めるだけの憧れの対象でした。稜線を撮った次の対象として、当然取り組むべき存在でした。冠松次郎氏の黒部溪谷の写真を見、文章を読み、憧憬の念のさらに深まった私は、この対象に取り組むにあたって、次の二つのことにこだわりを持ちました。

①どこかに黒部の水を感じるもの

②日本の溪谷の王者である黒部溪谷に敬意を称して、大型カメラで撮りたい

しかし実際に取り組んでみると、小型カメラであればどんなに楽かということを、思い知らされた三年間でした。

黒部のイワナの姿を、流れの速い溪流の中で見つけられるようになったのは、二年目の秋のことです。黒部に取り組み、意気込んで撮ったわけですが、現像であがつてきた写真は、見るに耐えない写真ばかりでした。井戸の底のような黒部の谷は、稜線とまったく違った要素で成り立っていると理解し始めたのは、黒部の谷を源流から河口まで歩いた二年目の秋のことです。たとえば、稜線においてはピーカンであればいいことのない好条件ですが、深い谷の底では絵になりにくい。明暗の差がありすぎて、一つの画面に納まらないからです。目に映る谷の姿にごまかされて、フィルムに焼きつく姿との違いに何故なのか

と思いつける時間がずっと続きました。かつて、黒部五郎小舎の支配人であった中野氏からは、小舎を訪れるたびにイワナをこ

ちそうになりました。ある時は刺身、ある時は塩焼きで黒部のイワナを堪能したわけですが、その時にイワナの釣り方も聞きました。かつて黒部の谷には、イワナが数多く住みついていました。谷がイワナ臭いほどの数が群れていたといいますが、それが静などに集まります。エサの流れてくる上流部から、強く大きなイワナがいるわけですが、臆病なイワナは一度釣り損なうと、その静では当分釣ることができません。そのために並んだ後ろのほうから、そおとと釣り上げていきます。

そうすればその静のイワナを全て釣り上げることができるといいます。そのためには流れの中のイワナの姿を目で確認して、イワナの目の前に毛針を落とさなければなりません。中野氏は一度釣り上げたイワナをまた元の場所に放すそうです。決して余分には釣り上げないのです。そして大事なお客さんが来た時などに、そのイクス（自然の流れ）から自由に釣り上げてくるというのです。実際その場所ですら素人の我々がいくらか毛針を落とすとい

てもイワナがかからないのに、彼が落とすといとも簡単にイワナがかかっています。まさにイワナの姿を見て釣っているのです。その時のことを思い出しながら、私も貴重なタンパク源であるイワナを釣ろうとしました。流れの速い黒部の谷では、イワナの姿を見かけるのはとても難しいことです。それが二年目に入り、流水の中にしか道のない上ノ廊下を何度も歩いているうちに、水の中の道が見つかり、流れの緩急がわかるようになりました。すると自然に、イワナの姿も見えるようになってきました。こうして谷と稜線のリズムは違ふのだと実感して初めて、黒部の撮影の方向も決まってきた気がします。



槍・穂高連峰

(90×240cm)



ジャンダルム（ロバの耳より）

(90×220cm)

九八年の地震

ジャンダルムの頂上で撮影していた時のことです。直径5mぐらいの大きな岩の上で三脚を立てていました。突然ズシンと体が持ち上がり、大岩がゆさゆさと揺れました。慌てて三脚を握りなおし、揺れが収まるのを待ちました。ジャンダルムの周りでは崩壊した岩がなだれうって落ちていく音が不気味にこだまします。周りをガスに囲まれているために断続して響く音におさら不安が掻き立てられました。あとで分かったことですがこの時の地震は、連続して北アルプス南部を揺すっていた地震の中でも二番目に大きなものでした。これだけ大きな地震が続きながら、傍目には北アルプスの姿がそれほど大きく変化しているようには見えません。昔と同じように見えるのです。しかし現場では、槍ヶ岳山荘の玄関口のテラスが大きく崩れましたし、東鎌尾根ではあの狭い尾根に大きな亀裂が入りました。あちこちに地震の爪跡が残されています。

また、この一〇年ほど気温の上昇が起こり始めました。異常気象が日常茶飯事のことで世界中で話題になっております。『槍・穂高』の撮影はそうした異常気象の中で行われた、ともいえます。私は学者ではないので本当のところは分かりませんが、至るところでなんとなくおかしいと感じております。実際、根雪になるのが遅くなり、雪の積もり方も少なくなってきました。お花畑にはイタドリがはびこり始め、高山植物の群落を席卷しはじめています。涸沢のナナカマドの成長がとても早く、林の中を歩いているかのごとくです。朝焼け夕焼けの見分けがつかないほど、スモッグが大気中に蔓延しています。

カメラを通して見た北アルプスの姿は、この一〇年ほどで激変している気がします。今私が一番強く思うことは、このかけがえない自然を美しいまま次の世代に残したい、ということ。美しい瞬間の自然を、感動の数々を、多くの方に伝えていく、それが我々山のカメラマンの役目ではないかと思っております。

(山岳写真家)

IWAHASHI, Takashi 岩橋崇至

- ・山岳写真家。一九四四年、東京生まれ。慶応義塾大学卒。
- ・日本大学芸術学部写真学科卒。
- ・日本山岳写真家協会代表。日本写真協会会員。日本写真芸術学会会員。日本山岳協会。日本山岳学会。日本山岳写真家協会。日本山岳写真家協会。日本山岳写真家協会。
- ・日本および世界の山々や自然、遺跡を撮影。
- ・著書に「北への山々」「黒部峡谷」「白頭山」「槍・穂高」「The Rokkaku」アラスカからメキシコまで、「北アルプス大百科」他多数、海外五ヶ国で出版。
- ・国内外の六ヶ所以上で、写真展を開催。
- ・一九九三年、韓国の大田EXPO'93で開催した「白頭山」展では五〇万人が来場。
- ・一九九四年から全米各地で「The Rokkaku」巡回写真展を開催中。
- ・一九九九年より文部科学省「子どもと話そう」全国キャンペーン協賛事業「岩橋崇至 山の世界」写真展を全国で開催中。
- ・一九九九年「山を愛する写真家たち」(東京都写真美術館)に出展。
- ・二〇〇〇年「二世紀に残したい自然」展(日本写真協会)に出展。
- ・二〇〇〇・二〇〇一年、フランス・イタリヤ・スペイン・カナダ・日本(今年六月・七月豊田市で開催)で開かれる「新世紀を拓く 世界一〇人の山の写真家展」に日本からただ一人選ばれる。

山と博物館第46巻第5号

発行 千代田 長野県大町市大字大町八〇五六一

TEL 0266-111111 FAX 0266-111111

印刷 大系タイムス印刷部

定価 年額一、五〇〇円(送料共)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五四〇七三三九